

時代に取残されないための 診療所のための 電子カルテ活用術

第2特集

エコー(左)や内視鏡と連動しており、検査データがすぐに取り出せる



管棚が増え、保存費用ばかりでなく、地震などによる倒壊で診療所スタッフが思わぬけがをする危険性も付きまとう。

山村院長が導入した電子カルテのインシヤルコストは約500万円、ランニングコストは年間約60万円。コスト面では大差がないものの、空いたスペースの活用で得られるメリットは計り知れないものになる。事実、待ち時間が短縮されたほか、待合室が広くなったと患者からは好評。その結果、来院者数も1日40人程度と徐々に増



待合室も明るい雰囲気

えてきているという。

今後、追加してほしい機能として山村院長は、患者とその家族をリンクする機能を挙げる。地元に着した診療所では、家族全員を診るところも多い。家族全員の投薬状況や治療履歴を合わせて確認できれば、より緊密な医療提供が可能になる。「地元根付く診療所では、地元の家族を代々診ている医師も多いと思います。この機能があれば、患者さんとの信頼関係構築もしやすいと思います」と強調する。

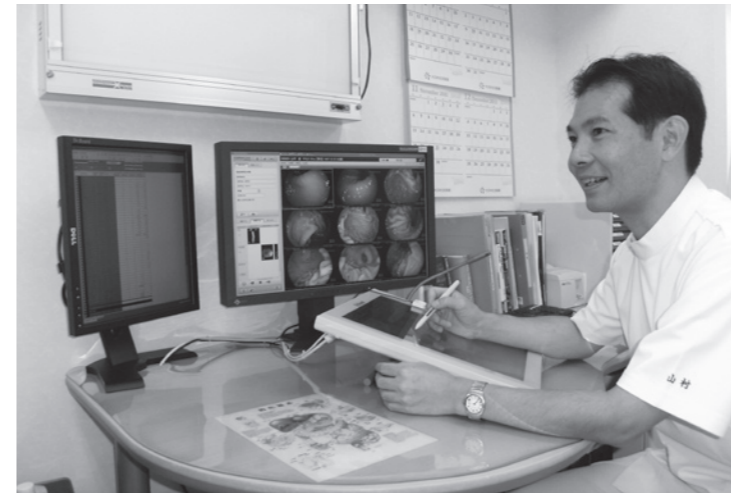
事例2

カルテの見直し時間が紙の半分以下に 今後は家族カルテの登場に期待

山村クリニック (東京都文京区)

紙が劣化する心配がない

患者を診察するにあたって、事前に過去のカルテに目を通す。しかし紙カルテの場合、経年劣化はもちろん、検査結果の添付などによって厚みが増し、収納に困ることも多い。



電子ペンで紙カルテと同じ感覚で入力できる

患者と向き合いながら 入力が可能

山村クリニックの山村進院長もこうした悩みを抱えていた。勤務医時代は紙カルテを使っていたため、2010年1月の開業時には電子カルテの必要性をそれほど感じていなかったものの患者の来院回数が増えるに伴って、紙カルテは厚くなっていく。紙カルテに対しては「すぐに見直すことができるところに魅力を感じていたが、年を重ねるにつれて不便になる。紙カルテは1〜2年以上通院される患者さんの場合、極端に厚くなります。劣化によって、読みにくくなる恐れもあるので、思い切った電子カルテを導入することを決めました」と山村院長は話す。

保守費用を考えると メリットが大きい

電子カルテ導入後、診療の準備に要する時間は紙カルテと比べると約半分に減少。また、カルテの保管棚が不要になったため、待合室や処置室を拡大することに成功した。

カルテの保管棚を置くことで、どれだけのコストが必要になるのだろうか。山村院長が採用した電子カルテを販売するメディコール・ジャパンによると、仮に戸建の診療所で1坪の単価が10万円、保管棚1つの設置に0.5坪必要とした場合、5万円が保存費用という名目で毎月消えていく。保管棚を無くし処置室の拡大などに充てると、落ち着いて診察できる環境が作れ、売上増加の機会が生まれる。しかし紙カルテを続けていると、患者の増加とともに保



山村 進
やまむら・すすむ ●日本医科大学卒業。日本医科大学付属病院第一外科(消化器外科)、日本医科大学付属多摩永山病院、北村山公立病院、医療法人社団正風会小林病院での勤務を経て2010年1月に当院を開業